

中世の石塔 - 板碑・宝篋印塔・五輪塔 -

中世の石塔の概要

中世の石塔といえば、板碑・宝篋印塔・五輪塔があげられる。それぞれは、東と西で塔型の分布の濃淡はあるが、供養塔や墓塔として広く全国で造立された中世を代表する石塔である。板碑は石で造られたいわゆる石塔婆である。関東地方では、埼玉県長瀬町や小川町などで産出される緑泥片岩を用材とする武蔵型板碑が代表的である。その数47,000基以上と想定されている。中央の碑面には仏・菩薩などの主尊を一字の梵字で表示した種子や図像が表現されている。また、種子の周囲には天蓋や蓮座が表現されている。種子の下には造立年月日や供養者の名が刻まれることもある。板碑は、14世紀頃から造立が始まり、15世紀後半以降に減少し16世紀末には造立されなくなってしまう。

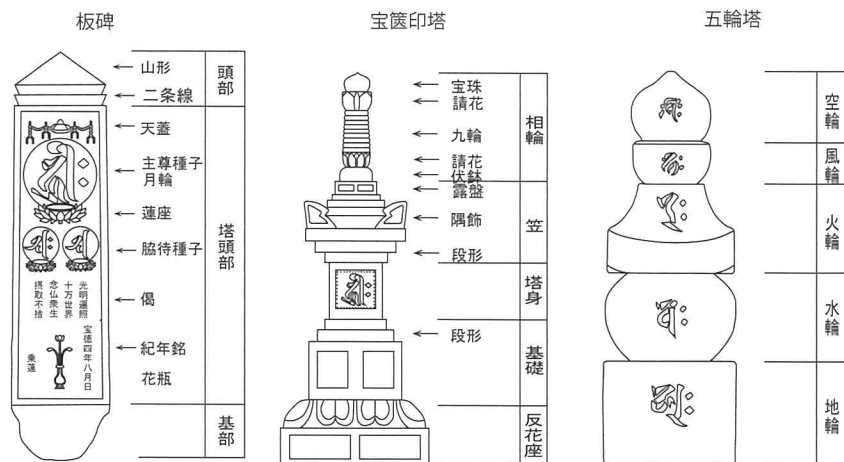
宝篋印塔は、本来は宝篋印陀羅尼という呪文を納める塔である。形態は上位から、相輪・笠・塔身・基礎の4部材からなり、地域によってはその下に反花座を備える。宝篋印塔の大きな特徴として、笠の四隅に付けられた馬の耳状の「隅飾」や笠の上下や基礎上の「段形」の存在

在があげられる。中世においては主に武家・富裕商人層などの有力者の墓塔・供養塔として認められ、近世になると大名・旗本の墓塔・供養塔にも用いられている。五輪塔は、本来仏教において万物を構成するとされる空・風・火・水・地という五大要素をそれぞれ宝珠形・半円形・三角形・円形・方形にかたどり、組み合わせて塔形化したものである。石で造られた五輪塔に関しては上位から、空風輪、火輪、水輪、地輪の4つの部材から構成され、地輪の下に反花座や繰形座を伴うものもある。中世後半になると組み合わせ五輪塔より一石で造られた一石五輪塔の方が数は多くなる。塔の表面には梵字が刻まれたものが多く存在しているが、江戸時代以降には「空・風・火・水・地」の五大要素が刻まれるものも現れる。

品川区の中世石塔

御殿山石塔群

幕末の品川御台場築造の土取工事の際に、人骨と共に100基以上の板碑、宝篋印塔・五輪塔の部材150点以上が御殿山から出土した記録が残されている。『東海寺文書』所収の「公用記録



▲板碑・宝篋印塔・五輪塔各部名称

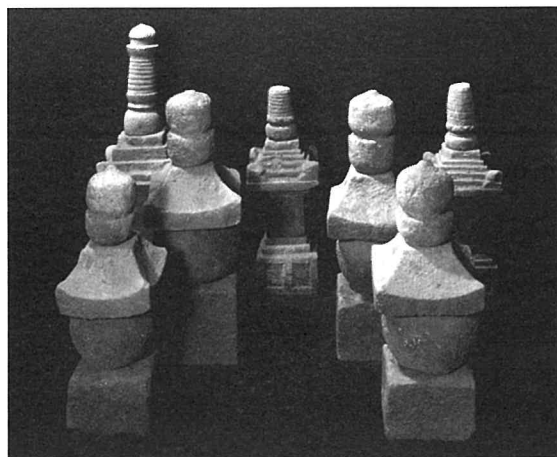
附山中事故」の記述や、『御殿山公使館地図』の「土取跡窪地」から嘉永7年（1854）に御殿山東の中腹付近（現在の北品川3・4丁目付近）で出土したと推定されている。出土品は、東海寺で供養された後、北品川の法禅寺に祀られており、現在の所、法禅寺には板碑119点、宝篋印塔部材51点、五輪塔部材104点が収蔵されている。銘文などから、板碑は14世紀初頭～15世紀末までに造立されたものだが、主体となるのは14世紀中葉～15世紀前半である。その中には、多摩川下流域を中心として分布している蝶型蓮座板碑が15基、近年提唱されている東京湾の北寄りに分布する浅草寺型蓮座板碑が5基みられる。宝篋印塔は14世紀末～15世紀前半、五輪塔は15世紀初頭～16世紀初頭にかけてそれぞれ造立されている。宝篋印塔・五輪塔の大半が安山岩製品であるが、一部には多摩地域を中心^いに分布する砂岩（伊奈石）製品もみられる。

海晏寺五輪塔

南品川と大井の境界に位置する禅宗寺院である補陀落山海晏寺（南品川5丁目）に4基の五輪塔が所在している。2基の五輪塔には明応4年（1495）の紀年銘が認められ、かつ死後行う法事を生前にあらかじめ執り行う供養である「逆修^{ぎやくしゆ}」が記されている。また、海晏寺五輪塔の



▲御殿山出土法禅寺所蔵板碑



▲御殿山出土法禅寺所蔵宝篋印塔・五輪塔

中には地輪に短冊状の意匠を施し、その中に銘文を刻む例が見られる。これは16世紀後半の北武蔵を中心に認められる例で、品川周辺地域では認められない特異例として重要な石塔と考えられる。

品川区内の中世石塔からわかること

品川区内には特徴的な中世石塔が混在している。板碑は、多摩川下流域を中心として分布している蝶型蓮座板碑と東京湾の北側に分布する浅草寺型蓮座板碑が御殿山出土の板碑内に併存している。また、御殿山出土の宝篋印塔の一部には北関東の特徴を有する部材が数点含まれている以外にも、多摩川流域に分布する砂岩（伊奈石）製品と南関東を中心とする安山岩製品が混在している。現状、御殿山出土の宝篋印塔は伊奈石製品では最も遠隔地とされている。五輪塔は海晏寺五輪塔のような北武蔵を中心に短冊状の意匠が認められている。

このような多種多様な影響を受けた中世石塔が混在している地域は品川周辺では例をみない。これは流通の拠点として栄え、海に面して寺院^いの薨が並んだ港湾都市品川の姿を、中世石塔が如実に表したものだといえるだろう。